

# 酪農振興の新ケース

## 柑橘酪農の部落

芦北郡津奈木村内野を見る

酪農拠点部落として、柑橘酪農という新しいケースに着眼、ぐんぐん実績をあげつゝある芦北郡津奈木村内野部落。その足あとを見るため現地ルポを試みた。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆



### 孝女千代の部落

立春早々の一日、雨もよおいのうすら寒さに、沿線の梅が白く眼にしみる。佐敷駅下車、県事務所在家畜衛生保健所を訪ねて篠崎所長に逢い、その案内で津奈木村内野部落にジープを駆る。曲りくねった佐敷太郎の山坂を三十分も走つたか、豁然とひらけた峠の展望に車をとめると、「あれが内野部落です」と篠崎氏が指さす谷間、三四十戸の家が点在し、左手からなだれた山すその段々畠に、麦の縞目をぬうて三四年生位の蜜柑樹がならんでいる。ついこの間二九〇年祭を催

### 内野の土地利用

水田	11町3反	1戸当	3反
畑	4町4反	〃	1反3畝
樹園	2町2反	〃	6畝
平均耕作面積			4反8畝

した孝女千代の塚はその下手、数本の美しい老松に守られて、新日本の道義に皮肉な瞳を投げているようだ。スケッチする間もなく雨がふり出した。再び乗車、だら／＼坂を下つて内野部落に着く。

目ざす農家に来て驚いた。五六年前、二条培土の取材に来た時訪ねた家だ。寺本一喜さん、そうだったのか。

### 美空ひばりという牛

寺本さんが外から帰るまで、篠崎さんと牛舎や畠をまわる。二頭の乳牛、一頭は(美空)ひばりさん、も一つは

### 雪の朝

「おーい」とこだまする。私は牛乳を肩に、さつぱりした空気を胸一ぱい希望とあこがれの世界を求めて、さくさくさくさくと歩いて行く。

### みかんの幼樹

やつとみかんの秋肥が終つた。一番のびのよい樹の下に立つて、自慢そうに両手をさしのびして、「にこり」とほ／＼笑む夫。植えてから三年、将来の夢を語りつゝ、雨の日も厭はず通つたその成果、澄んだ空に思いきり背のびして、緑の木々はあたりを君臨してゐる。

## 甘美なみかんの汁

土間の板壁に貼紙があつて墨痕淋漓とした、めである。申し合せ事項らしい。

### 酪農拠点部落実行目標

- 一、水稲早期栽培の全面実施
- 二、夏向畜舎の改善
- 三、自給飼料の計画生産
- 四、濃厚飼料は三種以上を混合
- 五、引運動は婦女子の日課とする。
- 六、果樹園の増設と計画生産
- 七、一般畜衛生の向上

これが実行できれば大したものだが、現に着々やつてゐるらしい。

帰つて来た寺本さんを囲んで、炬燵に入つたまゝ話を進める。若い奥さんが大きな盆にいつぱい大粒のみかんを盛つて出す。釜ほどもあるのをとつて試みると、甘美な汁がのどろおす。

「これで何年生位ですか」  
「五年生です」  
「三年位までは実をならさぬ方がいいです。」  
と篠崎さんが註を入れる。

### 文化的な雰囲気

寺本さんには若い奥さんと小さい子供さんが二人、それに二十ばかりの妹さんとお祖母さんがいる。ご両親は亡くなられて労働力は少い方だが、家にみながる平和な空気がそれを補つて余りがあるようだ。

それに古い農家にありがちな封建的な暗さがなく、明るいユーモアがたゞよつてゐる。ことに驚いたのは若い三人が皆文芸趣味をゆたかにもつてゐることだ。奥さんがもつて来た大学ノートにはいつぱい短歌や詩が書かれてゐる。一寸目を通してなかくうまい。生活体験からにじみ出る詩情の純粹さは、いわゆる文学青年の気どつた作品よりもどれだけ好感がもてるかしのれない。

農家もこの位文化的な雰囲気をもつようになつたら、日本は変わるだろう。私は心の中につぶやいた。

寺本つるを

寺本一喜